

アイヌ生活文化再現マニュアル



財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構

アイヌ生活文化再現マニュアル

縫う

—木綿衣—

発刊にあたって

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構は、平成9年7月の設立以来、アイヌ文化の振興、アイヌの伝統やアイヌ文化に関する知識の普及啓発、アイヌ文化等に関する研究の推進や助成などの各種事業を実施しております。

そうした事業の一環である「アイヌ生活文化再現マニュアル作成事業」は、アイヌの伝統文化を、映像や音声、文字などによって記録し、アイヌの人々をはじめとして、広く一般の人々や研究者の利用に供することにより、アイヌ文化の伝承・保存を図ることを目的としています。

本マニュアルがより多くの人々の利用に供され、アイヌ文化の振興が推進されるとともに、我が国の多様な文化の一層の発展が図られれば幸いです。

目 次

アイヌの木綿衣とは	1
木綿衣の制作〈基本的な衣服の形・縫い方〉	3
各部の名称	3
基本的な縫い方	4
身頃・袖のつくり方	6
身頃・背縫い	6
身頃・脇縫い	6
袖	7
基本的な刺繍	8
切伏模様・切り抜き模様	9
〈チカルカルペ〉	11
材料・用具	12
身頃	13
袖	16
刺繍	18
衿	20
袖をつける	21
完成	22
〈ルウンペ〉	23
材料・用具	24
身頃	25
袖	29
刺繍	30
袖をつける	32
紐を取り付ける・完成	32

〈カバラミフ〉	35
材料・用具	36
身頃	37
刺繍	40
衿	42
袖	44
袖をつける	45
完成	45
〈チヂリ〉	47
材料・用具	48
身頃・衿・袖の布に模様を写す	49
衿	50
刺繍	51
衿・衿下・裾	54
袖	56
袖をつける・紐をつける	57
完成	58
参考文献	61
木綿衣を展示・収蔵している施設	63

アイヌの木綿衣とは

古い時代、アイヌは生活する範囲の中で手に入れることのできる素材を用いて日常生活に必要なものをつくりました。なかでもその代表的な衣服には、動物の皮や植物繊維を使ったもの、そして交易で手に入れた木綿を使ったものがあります。木綿の布に、糸あるいは布で独特の文様が施された衣服はアイヌの衣服の中で最も身近なものです。アイヌの木綿衣には地域によって文様、あるいは手法に違いがあり「チカルカルベ」、「ルウンベ」、「カバラミッ」、「チヂリ」の4種類に分けられています。

アイヌの衣服には男女の区別はなく、男性の方が力強い模様であったり、体格に合わせて大きく作られていました。



チカルカルベ



ルウンベ



カバラミッ



チヂリ

かつて手に入れることのできた布は端裂が多かったため、アイヌは端裂を捨てることなく利用していました。アイヌの木綿衣には身頃と袖では布が違っているということもあります。木綿衣は日常着あるいは晴れ着として用いられてきましたが、現存しているものの多くは儀礼の時などに着た切伏や刺繍で様々な模様を施したものです。これらがアイヌ伝統文化の伝承とともに現代に伝えられています。

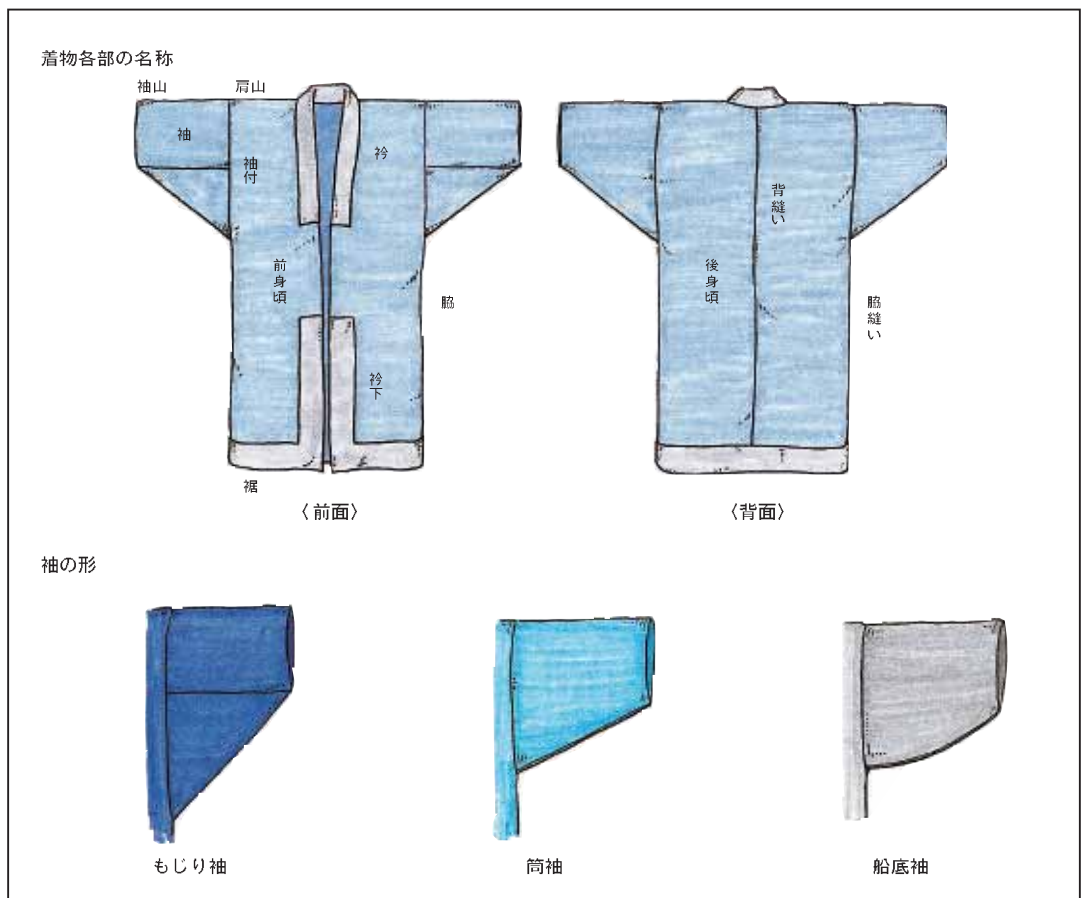
この記録は北海道札幌市、白老町、静内町、帯広市の4人の伝承者による木綿衣の再現です。

木綿衣の制作

〈基本的な衣服の形・縫い方〉

本来、アイヌの衣服は誰の為に作るのか決まっていますから、基準の寸法はありません。このテキストに記入されている寸法は今回製作した木綿衣のものです。アイヌの衣服は和服に似た部分も多いため、縫い方や用語は和服に準じています。また刺繍はアイヌ語の他、和風・洋風の用語を用いています。身頃、袖の形は本記録の木綿衣のものです。縫うときの布の向きや縫う方向など、決まりはありません。縫い手が作業しやすい方法で行います。

各部の名称

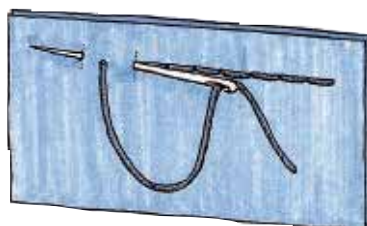


基本的な縫い方

1. 並縫い (ぐし縫い)



2. 本返し縫い



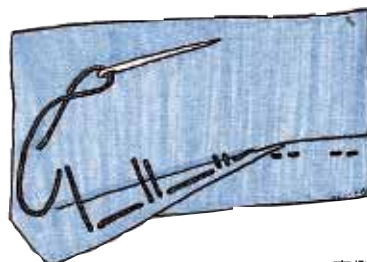
3. 半返し縫い



4. 耳ぐけ

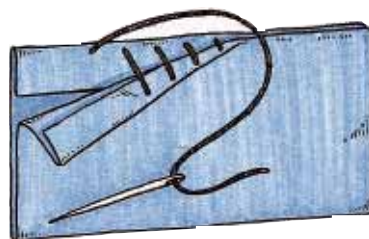


表側



裏側

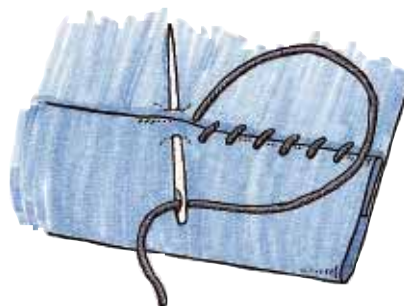
5. 本ぐけ



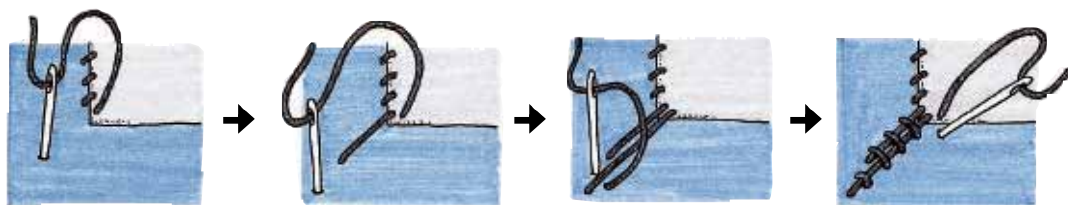
6. 普通まつり



7. 古いまつり方 (ルウンペで使用)



8. 「つの」の縫い方



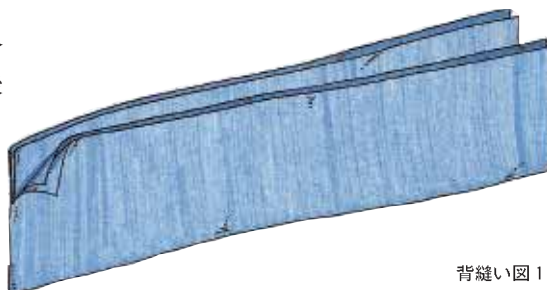
この図では「つの」に2本の糸を出していますが、1本のもの、3本出すものもあります。

身頃・袖の作り方

身頃は背縫いと脇縫いをします。木綿衣の背縫い、脇縫いは4種類とも基本的に同じです。

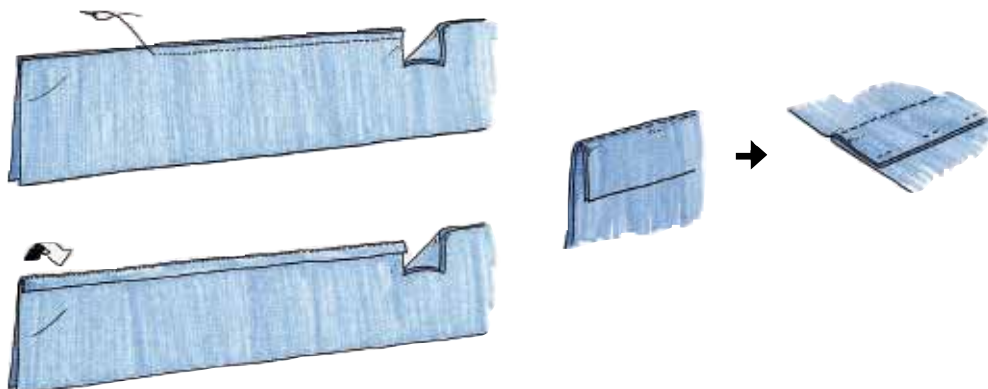
〈身頃・背縫い〉

身頃の布を中表に合わせて中央で二つ折りにします。布の中央の左右の肩にあたる部分に切り込みを入れます。切り込みは10cm前後です。(背縫い図1)



背縫い図1

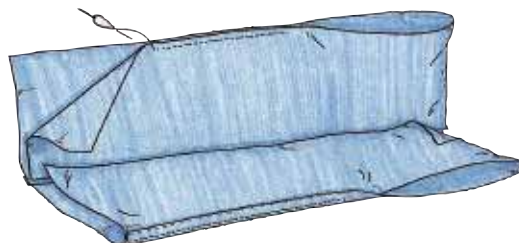
後身頃の左右の布を中表に合わせます。縫いしろを1cmにして並縫いします。縫いしろ分を倒して耳ぐけします。(背縫い図2)



背縫い図2

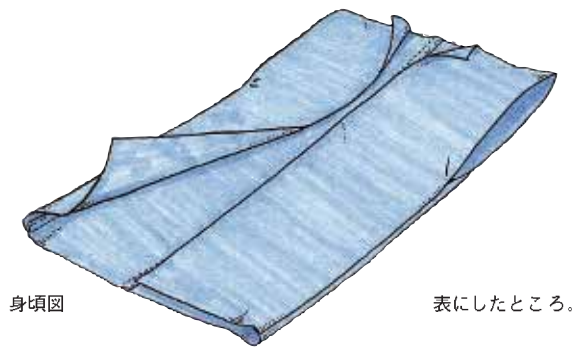
〈身頃・脇縫い〉

袖付分をあけて裾まで縫います。背縫いと同様に布の表を合わせて裏から縫います。縫いしろは身頃の前側に倒し縫います。(脇縫い図、身頃図)



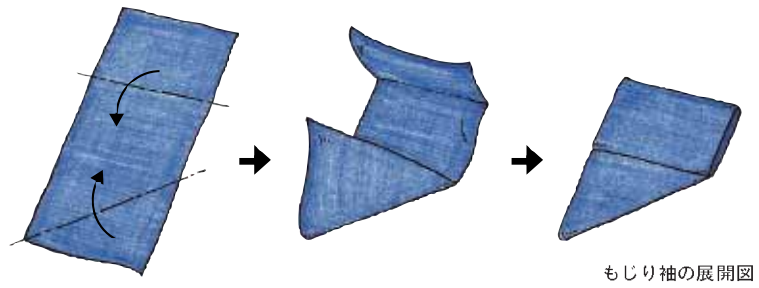
脇縫い図

裏から縫います。

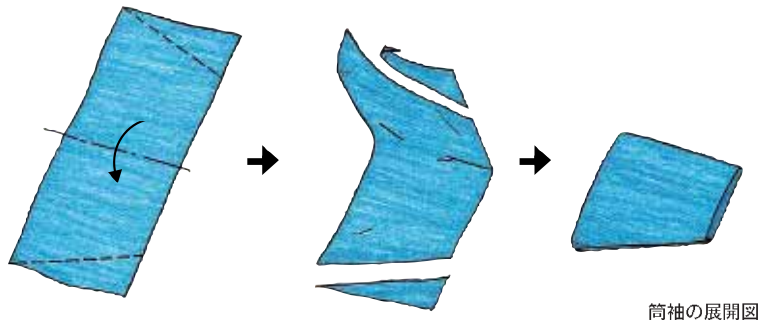


〈袖〉

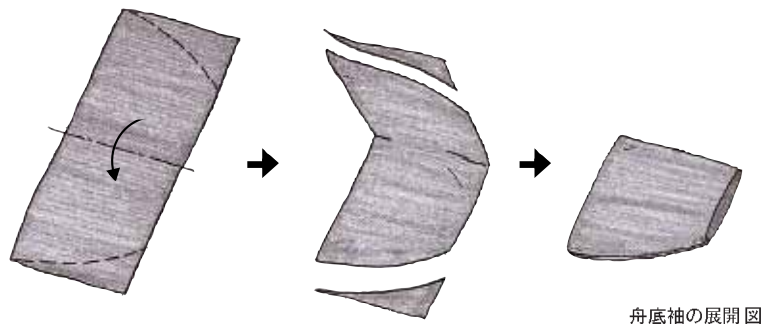
もじり袖



筒袖



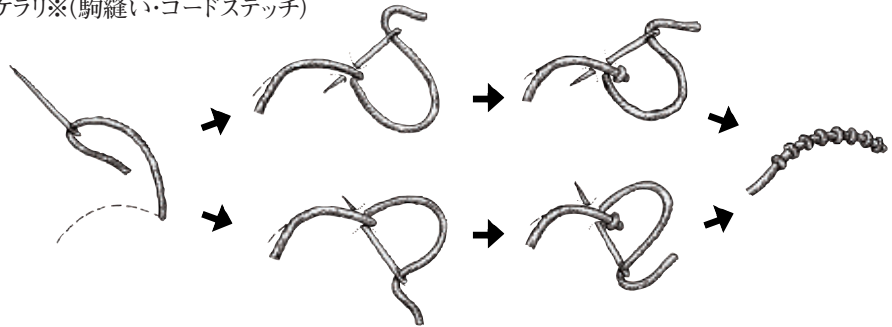
舟底袖



基本的な刺繍

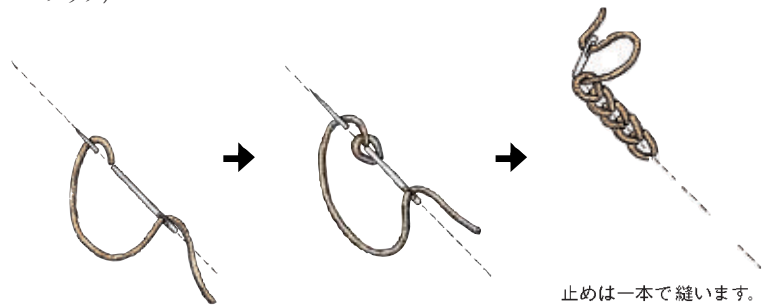
※印はアイヌ語

1. イカラリ・カスケラリ※(駒縫い・コードステッチ)



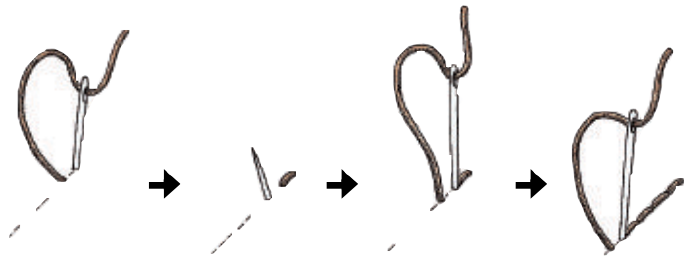
下段はルウンヘで使われている縫い方です。

2. オホカラ※(鎖縫い・チェーンステッチ)

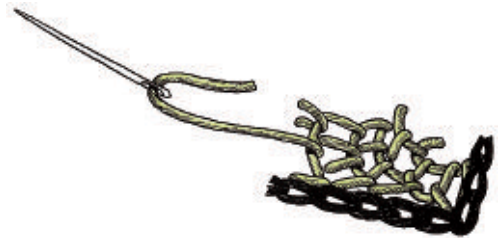


止めは一本で縫います。

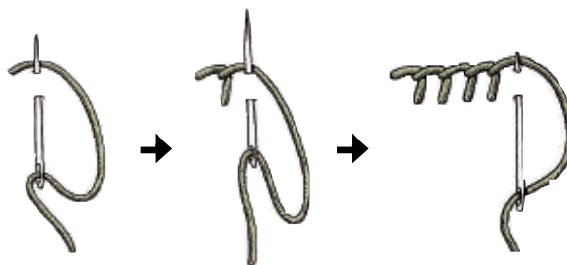
3. 返し縫い・バックステッチ



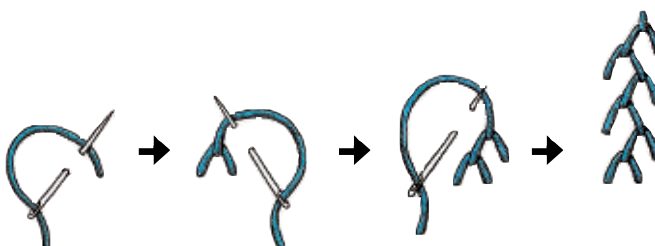
4. エタラカ※(規則性のない縫い方)



5. ボタンホールステッチ又はブランケットステッチ



6. フェザーステッチ



^{きりぶせ}
切伏模様・切り抜き模様

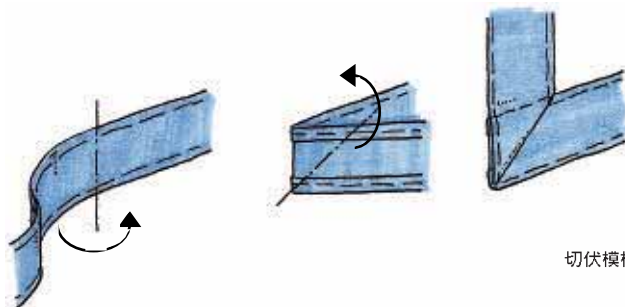
〈切伏模様 (アップリケ)〉

布を縫い付けて描く切伏模様です。(写真)



切伏模様写真

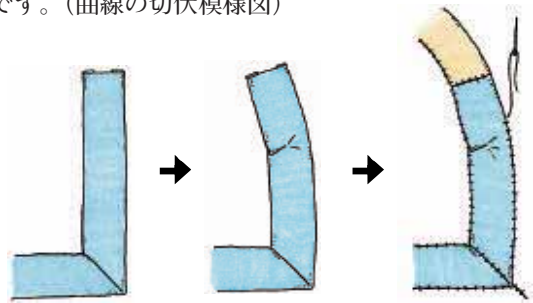
直線裁ちの模様が角に来たときには、布を切らずに曲げます。(切伏模様図)



切伏模様図

直線裁ちの布で緩いカーブを描くときの方法です。(曲線の切伏模様図)

布は切らずに
片側を折り込みながら
曲げていきます。



曲線の切伏模様図

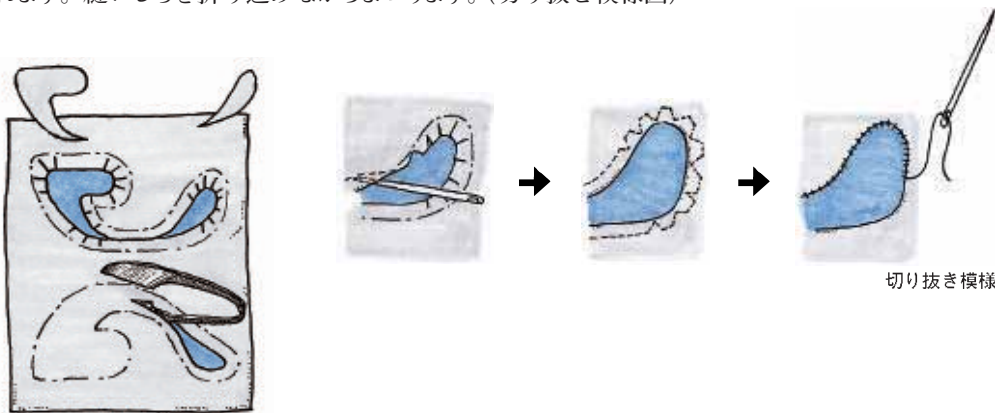
〈切り抜き模様〉

布を切り抜き、下地を出して模様にする切り抜き模様
です。(切り抜き模様)



切り抜き模様

着物の布に切り抜く布を置き、しつけをしておきます。次にハサミで切り抜き、縫いしろに切り込み
を入れます。縫いしろを折り込みながらまつります。(切り抜き模様図)



切り抜き模様図

チカルカルペ

チカルカルペは直線裁ちの布でつくる切伏模様の上に刺繍を施した木綿衣です。

北海道のほぼ全域に見られますが特に日高西部と東部、北海道西海岸に多く残っており、地域によって下地の布や切伏模様、刺繍の模様や手法が違ってきます。

昔のチカルカルペには樹皮を使って衣服に仕立てたもの、浴衣地などの柔らかい生地を使ったもの、男物の和服そのままに模様を施したものなどがあります。



チカルカルペ

ここで紹介するチカルカルペは、北海道札幌市に住む横山芳江さんが製作したものです。



横山芳江さん

材料・用具

縞模様が入った厚地の木綿布を使い衣服をつくります。
布でつくる模様・切伏（きりぶせ）には黒色などの木綿の裂を使います。（写真1）



写真1

[材料・用具]

- ・一着分の布（古布・縞模様入り）
身頃：2 m40cm×2枚
袖：80cm×2枚 [布の幅はいずれも33cm] ※1
- ・仕立てる糸
木綿糸黒色
- ・切伏布
木綿布黒色、灰色、赤色
帯状のものは端を折り、しつけをしています。
5～10cm巾の布を数種類使います（写真2）
- ・切伏布をまつる糸
木綿糸黒
- ・小衿の布28cm×6.5cm（五枚重ねの木綿布に刺子をしたもの）
- ・刺繍用の木綿糸（3色）
白色
山吹色
緑色
- ・針
- ・ハサミ
- ・布に印をつける道具



写真2

※1 寸法はこのチカルカルペのものです。

身頃

1 背縫い・脇縫い

脇は肩山から45cm袖の丈の分をあけています。背・脇縫いを終えた身頃は襟下から裾まわりを1cm巾になるように表側に折ってしつけをします。(図1、写真3、4)

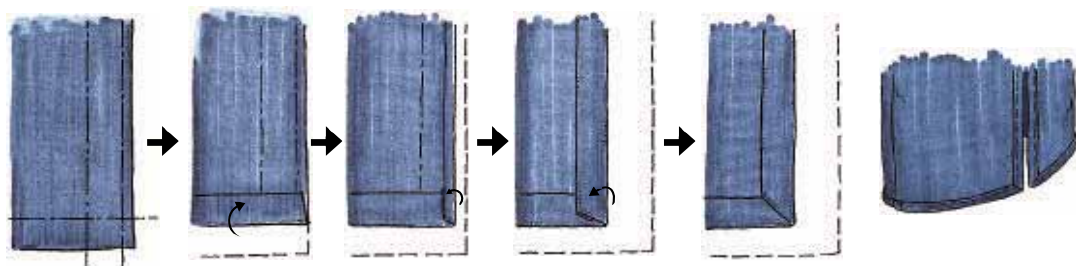


図1



写真3

前身頃



写真4

後身頃

2 衿芯 (小衿の布、うしろ衿)を縫いつける

衿芯は五枚重ねの木綿布に刺子をしたものです。(写真5、6)



写真5 表側



写真6 内側

肩山の切り込み部分を開き、刺子をした衿芯を身頃の裏側から当ててまつります。身頃の衿は小衿に合わせて折ります。(図2、写真7)

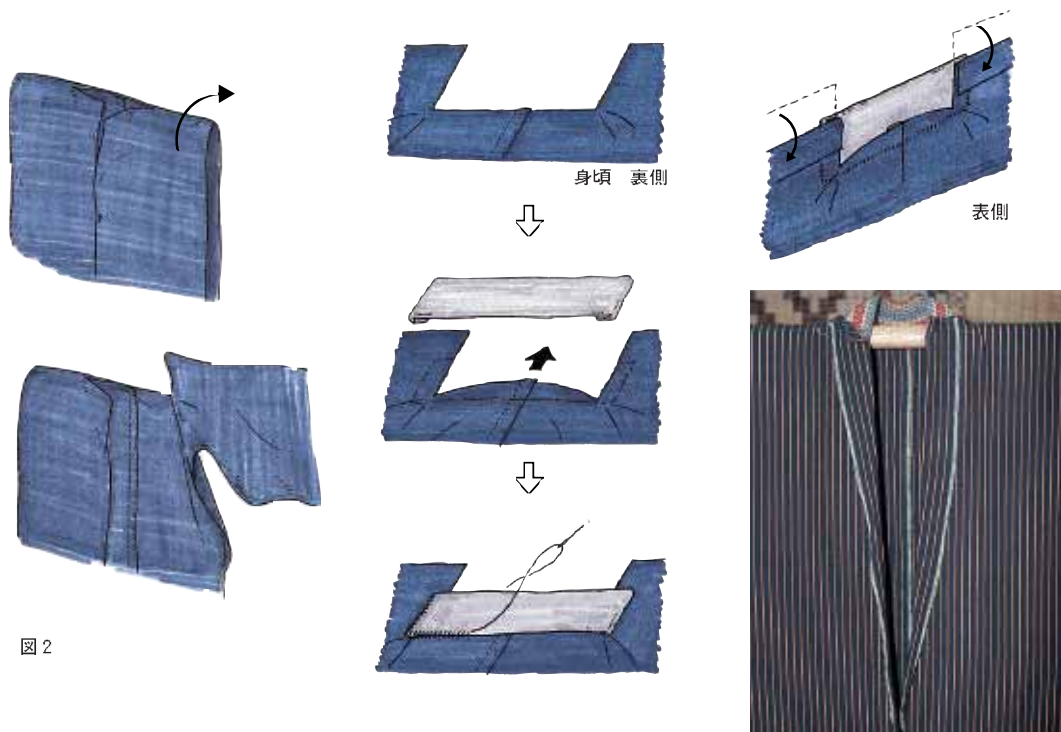


図2

写真7

3 切伏

直線の帯状の布で切伏をします。切伏布は衿下、裾の周囲から置いていきます。切伏布は黒色の糸でまつります。(写真8) 9 ページ参照



写真8

裾周りが決まると、次に切伏布を外側から中側へ向かって置き、しつけをします。裾側は下から上へ、背中では肩から下へと切伏布を置きます。(写真9)



写真9

切伏布の周囲をまつり、角には模様が途切れないようにつける「つの」を縫います。(写真10) 5 ページを参照。



写真10

切伏は背と裾まわりに分かれています。巾の違う布、黒色以外に赤色や灰色の布も使います。(写真11、12)



写真11 裾まわり・前身頃



写真12 後身頃

袖

1 もじり袖

袖の布の表面を上にして置き、袖山は直角に、袖下側は斜めに折り、上下を合わせます。袖付け側にはみ出した部分、斜めに折った側の縫いしろ分を残して切ります。(写真13) 上下を合わせた所を縫い、縫いしろを袖山側に折ってまつります。(図3)



写真13

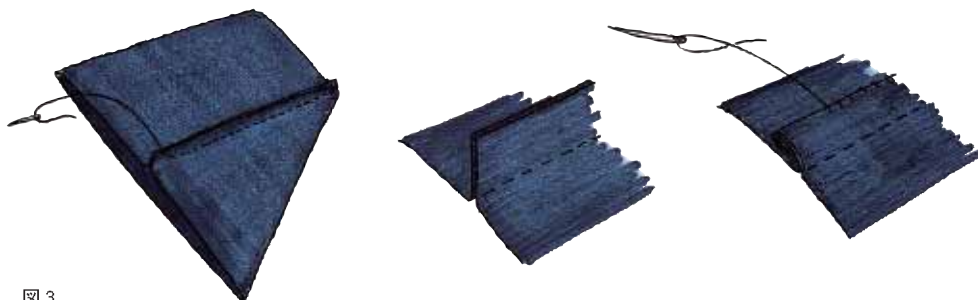


図3

袖を表にします。もじり袖は縫い合わせた側が前です。左右対象につくります。



図4

2 切伏

切伏布は袖口、袖山側に置いています。(図5)

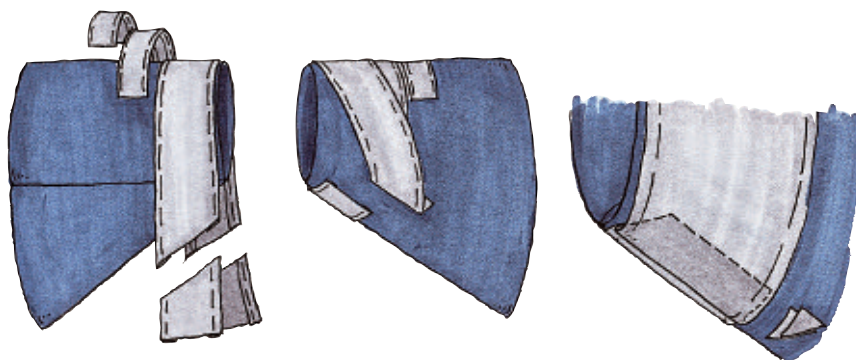


図5

袖山側から見た切伏模様が置かれた様子。(写真14)



写真14

切伏布をまつり、突起の模様を縫い付けます。(写真15)



写真15

刺繍

1 イカラリ

模様の下絵は切伏布の上に描いておきます。イカラリは同じ太さの白い糸を二本使います。縫いはじめは着物の布地と切伏布の間を通し、糸玉を表から見えないようにします。置いた糸を2~3mm間隔で絡み、一本の線で模様を縫います。

(写真16) 8 ページ参照。



写真16

2 オホカラ

オホカラはイカラリに沿って、茶色の糸で刺繍しています。(写真17)

場所により「つの」を縫い付けています。

8 ページ参照。



写真17

3 エタラカ

大きさや方向に規則性の無い縫い方、エタラカです。刺繍で囲まれた空間を緑色の糸で埋めます。(写真18)

8 ページ参照。



写真18

いずれの刺繍も縫い始めと終わりの糸玉は布と布の間に入れ、着物の表にも裏にも糸玉を見せないようにします。

切伏には赤色や灰色の布も入り、その上に三種類の刺繡を施しています。(写真19、20、21、22、23)



写真19

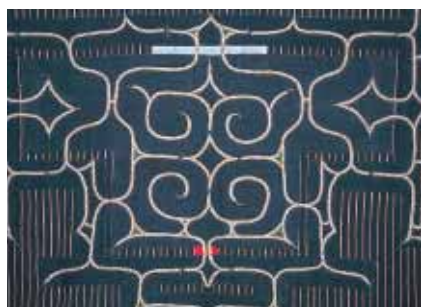


写真20



写真21



写真22



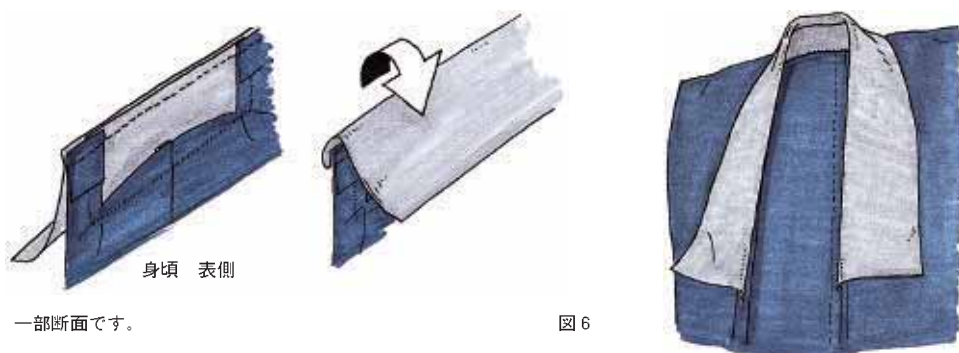
写真23

衿

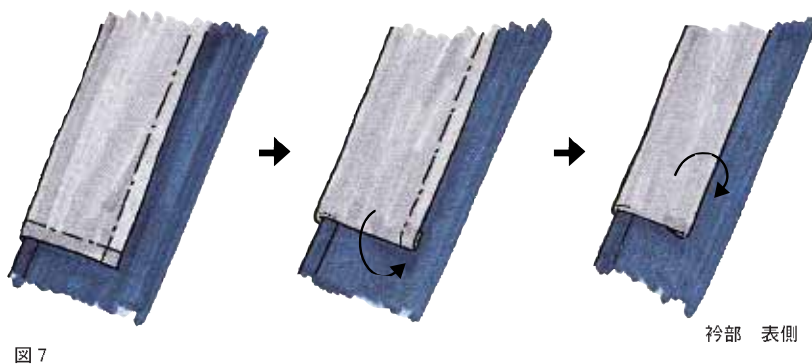
身頃の裏側に黒の木綿の衿布を縫います。
衿布を表側に巻き込み、衿の幅を約7cmにしてまつります。(写真24、図6)



写真24



布の端はおよそ1cm巾で巻き込みます。衿芯と身頃が重なるところは返し縫いをして縫い目を丈夫にします。(図7)



身頃が出来ました。(写真25、26)



写真25



写真26

袖をつける

身頃を裏にして袖を差し入れます。袖は表のままです。身頃と袖を並縫いし、袖を付けます。身頃の脇の下は縫いしろを開くようにして縫います。

縫代は袖側に倒します。(写真27、28、図8)



写真27



写真28

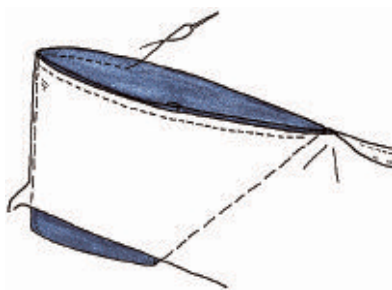


図8



身頃、袖とも裏側

完成



写真29



写真30



写真31



写真32

かつて切伏や刺繍の模様は母から娘へと受け継がれてきました。娘が母親の手元を見て覚えた手仕事なのです。

ルウンペ

ルウンペは木綿、絹、メリンスや晒などの布を使った切伏や刺繍がふんだんに用いられた、華やかで手の込んだ木綿衣です。北海道南西部の八雲、有珠、虻田などの噴火湾沿い、そして大平洋岸の室蘭、白老で着ていたものです。文様のつけ方などで地域性がわかります。



ルウンペ

ここで紹介するルウンペは、白老に住む河岸麗子さんが製作したものです。



河岸麗子さん

材料・用具

端裂も大切に使用していたアイヌの慣習のとおり、短い木綿の布を接ぎ合わせて衣服を作ります。身頃の布を着丈の長さに接ぎ合わせる前に各部の背縫いをします。

(写真33)



写真33

身頃の布

[材料・用具]

- ・一着分の布（古布・紺色）※2※3
 - 身頃：2 m 44cm×2枚 布の幅は28cm
 - 袖：63cm×2枚 布の幅は30cm
 - 紐：30cm×6cm×4枚
- ・仕立てる糸（木綿糸：黒色）
- ・切り伏布等模様のための布
 - 絹、小袖の端裂、木綿、天竺、更紗、キャラコ、メリンス、晒
- ・切り伏布等をまつる糸（木綿糸：白、山吹色）
- ・小衿の布 8cm×22cm※（木綿：山吹色）
- ・刺繍用の糸（4色）
 - 木綿糸：黒、白、山吹色
 - 絹糸：山吹色
- ・針
- ・ハサミ
- ・布に印をつける道具

※2 布を接ぎ合わせた長さです。

※3 寸法はこのルウンペのものです。

身頃

1 背縫い・接ぎ合わせ・脇縫い

背縫いを終えた身頃が着丈になるように必要な分を接ぎ合わせます。後ろ身頃の裾側から始めます。縫いはじめの糸玉は重なる二枚の布の間に入れ、布が重なるところでは補強のために返し縫いをします。接ぎ合わせた縫いしろは、着物の眉山側に折り耳ぐけで縫いとめます。(図9)

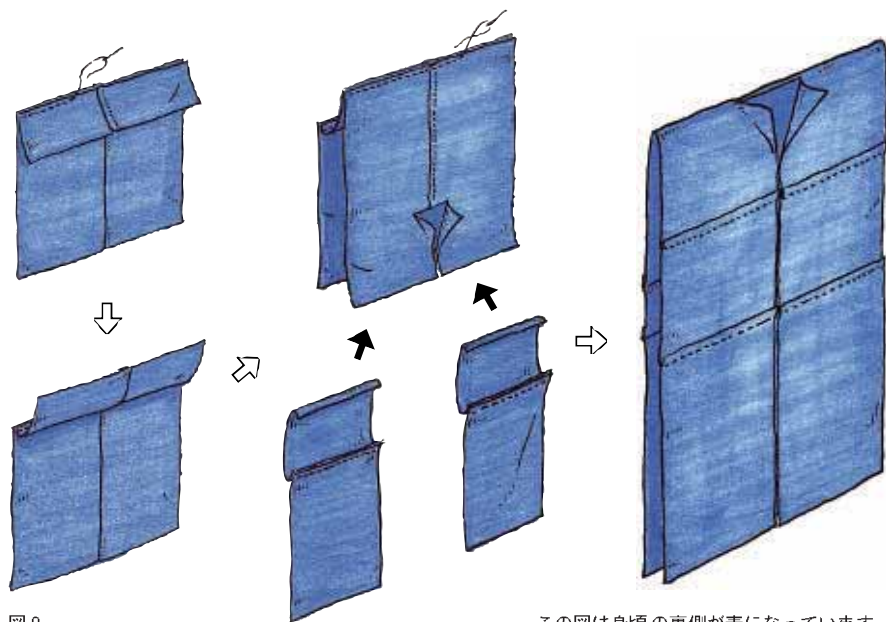


図9

この図は身頃の裏側が表になっています。

脇縫いは袖付け分を45cmあけています。(写真34)



写真34

衿の部分は裏側に斜めに折ります。肩山側は巾4cm、肩山から65cm下がった衿の下の巾を1cmにしてしつけをします。衿下は1cm、裾周りも1cmの巾で三つ折りをします。(図10)

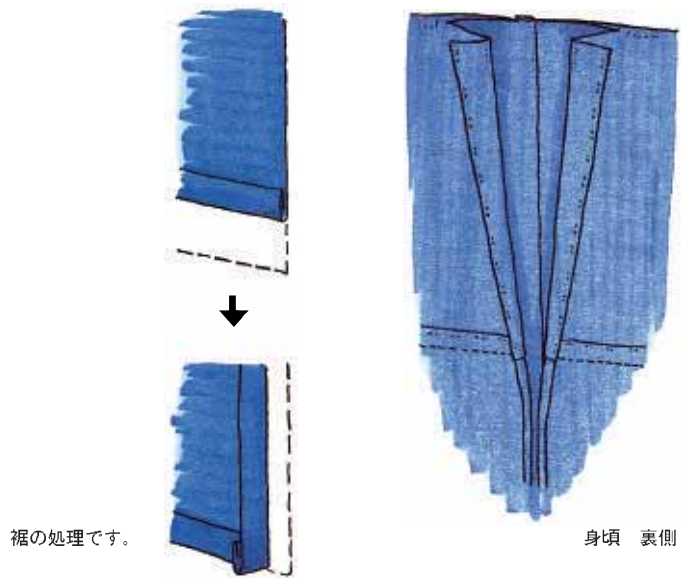


図10

身頃の形が整いました。(写真35、36)



写真35

表・前身頃

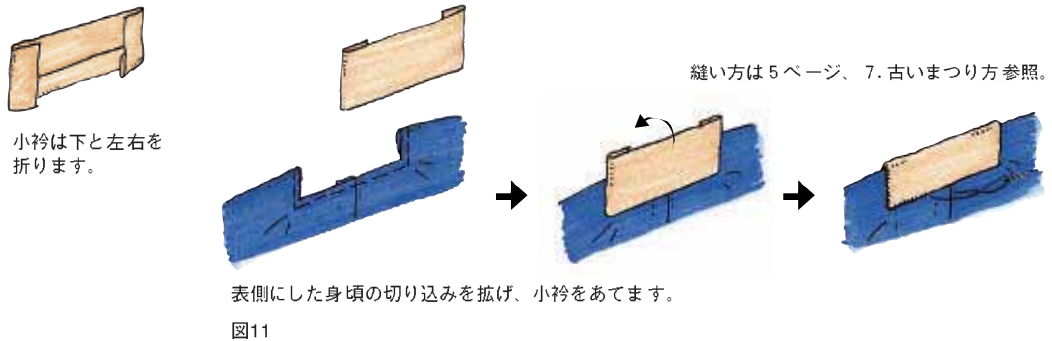


写真36

表・後身頃

2 小衿

小衿は山吹色の布を使い、黒の木綿糸でまつります。現存するルウンペの多くは、古い手法のまつり縫いで縫われています。(図11)また、ルウンペの縫い糸には刺繍も含めてイラクサを撚った糸が使われているものもあります。



このルウンペでは、小衿も模様の一部にするため、衿布で包みません。後衿に紺の木綿布を縫いつけ、表側に巻き込みます。これは補強です。(写真37)



衿の表側には別な布で模様をつけています。糸は布と似せた色の木綿糸を使います。(写真38)



3 切伏・切り抜き模様

切伏や切り抜き模様には、木綿、絹、小袖の端裂、天竺、キャラコ、メリンス、晒、更紗を使っています。(写真39)



写真39

帯状の布は折る、曲げるなどして切伏模様をつくります。曲線のある模様は縫いしろ分を考えハサミで切ります。(写真40)

まつる時には糸玉を切伏布と身頃の布の間に入れて隠します。まつり方は小衿の時と同じです。

また角には「つの」を縫います。5 ページを参照。



写真40

切り抜き模様（四角い白い布部分）。10ページを参照。

絹の切伏（アルファベットの逆S字の布部分）。絹の切伏布は縁を並縫いして、縁にはイカサリを施します。刺繍は縁模様になると同時に絹の補強にもなります。イカサリの一部は、切伏布から離れて刺繍だけで模様を作っているところもあります。(写真41)

絹の布を使った模様では、縁に沿って木綿糸を置き、絹糸で絡めたイカサリもあります。



写真41

縁模様のイカサリは、同じ太さの木綿糸を使います。ここでは切伏の縁に沿って置く糸を二本にする手法を紹介します。絡むのは一本の糸で1mm間隔です。(図12)

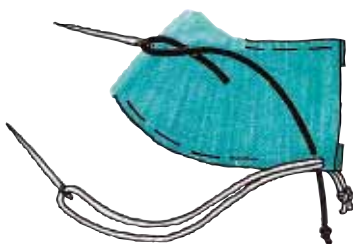


図12



置く糸と絡める糸の色を変えています。



写真42 前身頃



写真43 後身頃

背中の模様の中には軽く撚った二本の糸で十字の模様が入っています。(写真44)

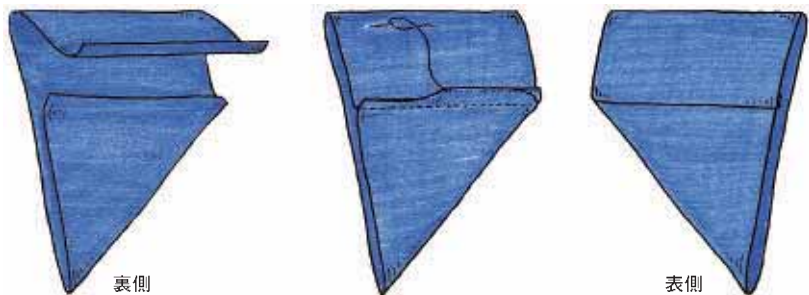


写真44

袖

1もじり袖

袖の布の下側を斜めに折り、縫いしろを1cmにして並縫いします。縫いしろを袖山側に折り耳ぐけします。(図13) 7ページを参照。



表側

表側

図13

2 切伏

切伏にはキャラコ、晒を使います。直線裁ちの布以外はハサミで縫いしろを残して模様を切り、縫いしろを内側に折ります。曲線部分では縫いしろに切り込みを入れておきます。(写真45、46、47)



写真45



写真46

袖山側



写真47

袖下側

刺繍

イカラリ

刺繍はイカラリです。黒色の木綿糸を使います。(写真48、49) 8 ページを参照。

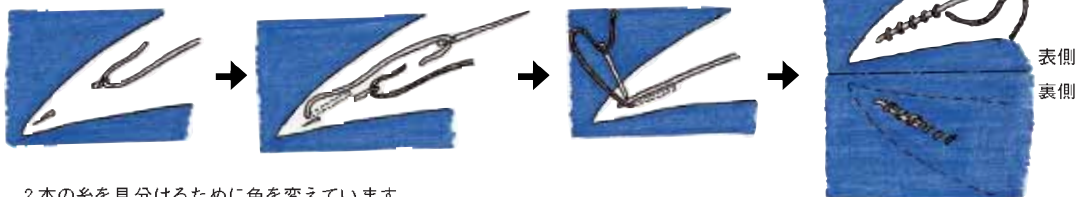


写真48



写真49

縫いはじめに糸玉をつくらぬ方法です(河岸さんの手法)。(図14)



2本の糸を見分けるために色を変えています。

図14

模様をつなぐ方法です。(図15)

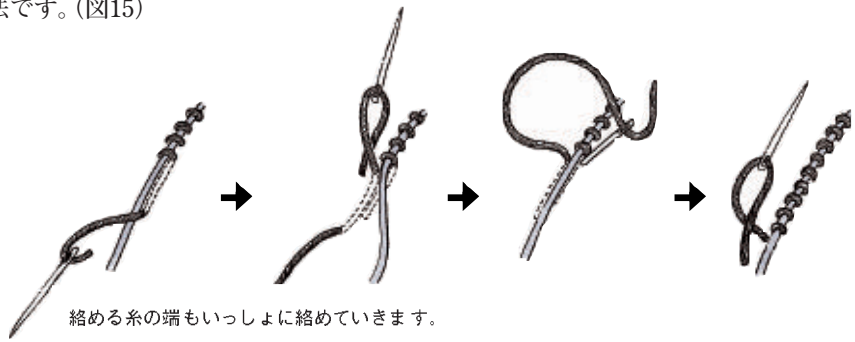


図15

模様の方向を急な角度で変える時の縫い方です(河岸さんの手法)。(図16)

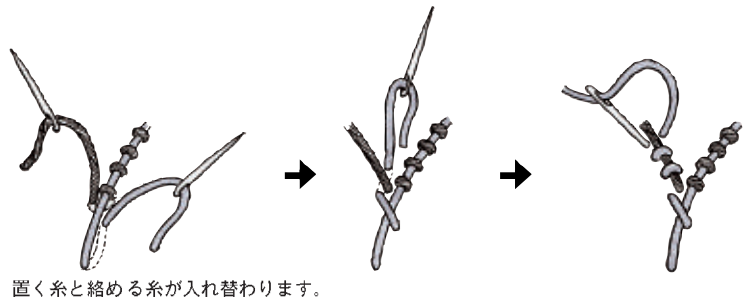


図16

裾模様の表側と裏側です。(写真50、51)



写真50

裾模様表側



写真51

裾模様裏側

袖をつける

模様を入れ終った袖を身頃につけます。(写真52)

袖は表にしたまま裏返しにした身頃と合わせ、脇から縫い始めて一周します。縫い始めは返し縫いをします。袖を引き出し裏にして縫いしろを袖側に倒し縫います。縫しろを縫うのは脇の手前で止めます。(図17)



写真52

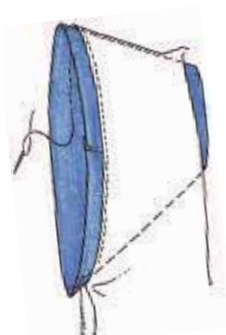
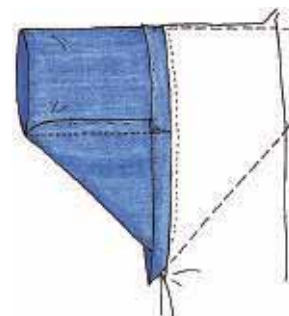


図17



身頃、袖とも裏側です。

紐を取りつける・完成

ルウンペは羽織るものですが、再現したルウンペと同じく細い紐を付けます。紐は木綿の布を使います。(図18)

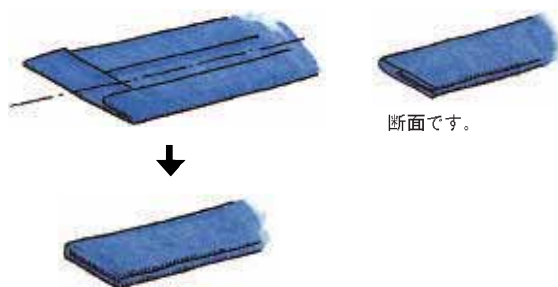
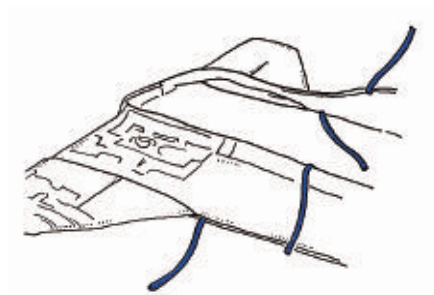


図18



紐は右袖の下と左右の衿下、そして内側の左袖下に4本縫い付けると完成です。



写真53



写真54



写真55



写真56



写真57



写真58



写真59

アイヌ衣服の中でも華やかで手の込んだ技術で作られるルウンペは、身分の高い村の長などが儀式のときに着たものです。ルウンペの材料は外来品が多く、かつては手に入れるのにとっても苦労しました。漁場で働いて木綿や絹を手に入れていたのですが、一年間働いた分では足りず三年かかってようやく一枚のルウンペが完成したという話も伝えられています。

カハラミツ

カハラミツは大幅の白布に切り抜きの模様を作り、木綿の生地に張りつけた衣服です。北海道太平洋岸の日高東部に多く見ることのできる木綿衣です。浦河の近く、静内あたりが発祥と言われ、時代も比較的新しく明治の中頃にはすでにつくられていました。

カハラミツは現存するアイヌの衣服の中では最も多く残されています。



カハラミツ

このカハラミツは、浦河に住む浦川ツタさんが製作したものです。



浦川ツタさん

材料・用具

カパラミフは大幅の白い布を模様に使います。(写真60)



写真60

裾模様になる布

[材料・用具]

- ・一着分の布※4、※5
 - 身頃：2m64cm×2枚 布の幅は約40cm
(紺地に白と黒の縞模様・ぬるま湯で2～3回揉み洗いしたもの)
 - 袖：87cm×2枚 布の幅は40cm
(紺色・ぬるま湯で2～3回揉み洗いしたもの)
- ・仕立てる糸
 - 木綿糸：黒色、白色
- ・模様の布
 - 大巾の木綿布：白色
- ・模様の布をまつ糸
 - 木綿糸：白色
- ・小衿
 - かすり
- ・衿から身頃の周囲
 - 柄入りの木綿布
- ・刺繍用の糸
 - 木綿糸：黒色2種類(太い糸・細い糸)、白、茶
- ・針
- ・ハサミ
- ・印つけの用具

※4 寸法はこのカパラミフのもので。

※5 博物館などに残されている木綿衣の布の中は32～33cmが多く、今回使用した布では広すぎますが、古くからアイヌが布を大切にしていたことに習い、切って巾を狭くせずに縫しろ分を多くとって制作しています。

身頃

1 背縫い・切り抜き模様の布を張り付ける

小衿用の切り込みを左右に10.5cmづつ入れます。背縫いの縫しろは1.5cmです。

脇縫いをする前に、背縫いの終わった身頃に大巾の白い木綿布を背中と胸の位置に置き、しつけをします。白布には模様を写しておきます。(写真61、62)



写真61

背中に布を置く



写真62

胸元

2 脇縫い・切り抜き模様の布を張り付ける

脇縫いは、袖を付ける部分を37cmあけて並縫いします。縫い始めは返し縫いをします。(写真63)

身頃の布の中が古い時代の布よりも広いので縫いしろを多くとります。(図19) 模様になる布と重なるところ、糸をとめるところにも返し縫いをします。



写真63

身頃 裏側

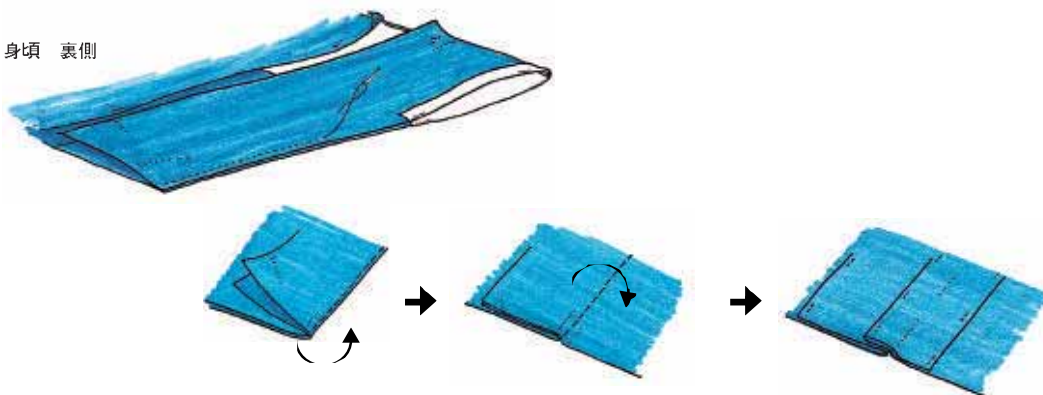


図19

脇縫いを終えた後、裾まわりに大巾の白い布を置き、前後の身頃の周りを一枚の布で覆います。
(写真64、65)



写真64 前身頃



写真65 後身頃

3 切り抜き模様

左右対象の模様の作り方です。裾模様の例です。八つ折りにした紙に模様を描きます。すべての面に同じ模様をなぞって写します。(図20) 開いて模様がつながるようした図案です。(写真66)

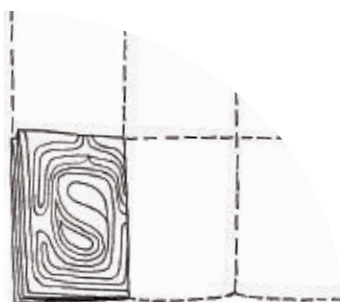


図20



写真66 裾模様の図案

切り抜き模様を作ります。模様を切り抜くところにハサミを入れます。折り込む部分は3~7mmにして、切り込みを入れます。曲がりでは間隔を狭くします。切り込みを深く入れすぎるときれいな曲線にならないので、切り込みは折る線の少し手前までにします。(写真67)
10ページ参照。



写真67

縫いしろを折り込み、普通まつりをします。(写真68)
縫い方は5ページ参照。



写真68

切り抜き模様の一部。(写真69)



写真69

模様の布の周囲も縫いしろ分を折り込み、まつります。(写真70、71、72)



写真70

前身頃



写真71

後身頃

裾は縫いしろを1.5cmとり身頃の表側に折ります。
裾から切り抜き模様の白い布まで8cmあげています。



写真72

刺繍

1 カスケラリ

この地域でカスケラリと呼ばれているイカラリです。太さの違う2種類の黒の木綿糸を使います。(写真73)
縫い方は8ページ参照。

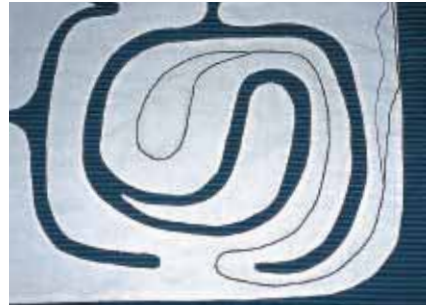


写真73

はじめに糸玉を作しません。太い糸を身頃の裏から表に通し、裏側に7~8cm残しておきます。細い糸も近くに通し同様にします。模様に沿って太い糸を置き、細い糸で絡めていきます。(図21) 置く糸が細い場合は2本にします。

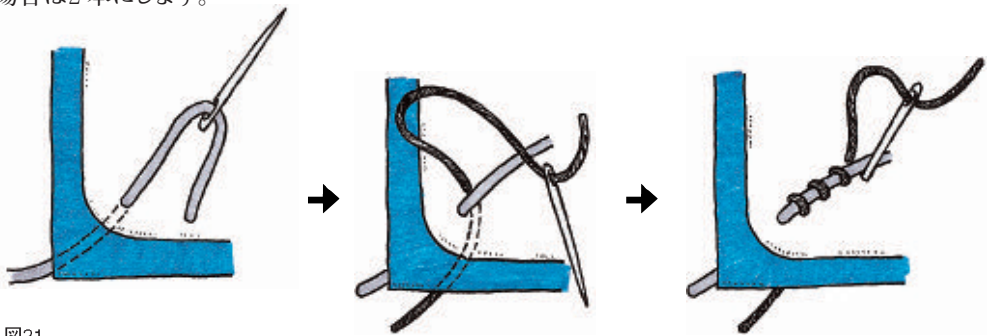


図21

見分けやすいように糸の色を変えています。

表側図

5cmほど縫い進め、裏に残しておいた2本の糸を針に通します。絡んだ縫い目にそれらの糸を通して余った糸を切ります。(図22)

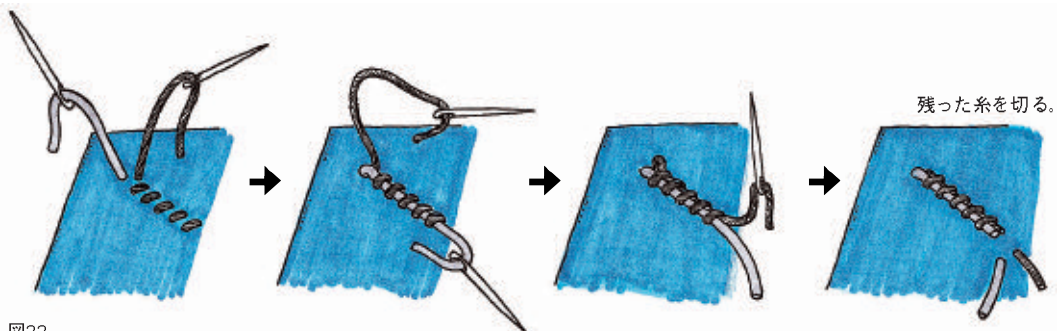


図22

裏側図

2 オホカラとその変型

オホカラ (図23、写真74)



図23

8 ページ参照



写真74

オホカラの変型・ボタンホールステッチ又はブランケットステッチ
(図24、写真75)



図24

9 ページ参照



写真75

3 返し縫い

返し縫い・バックステッチ
(図25、写真76)



図25

8 ページ参照



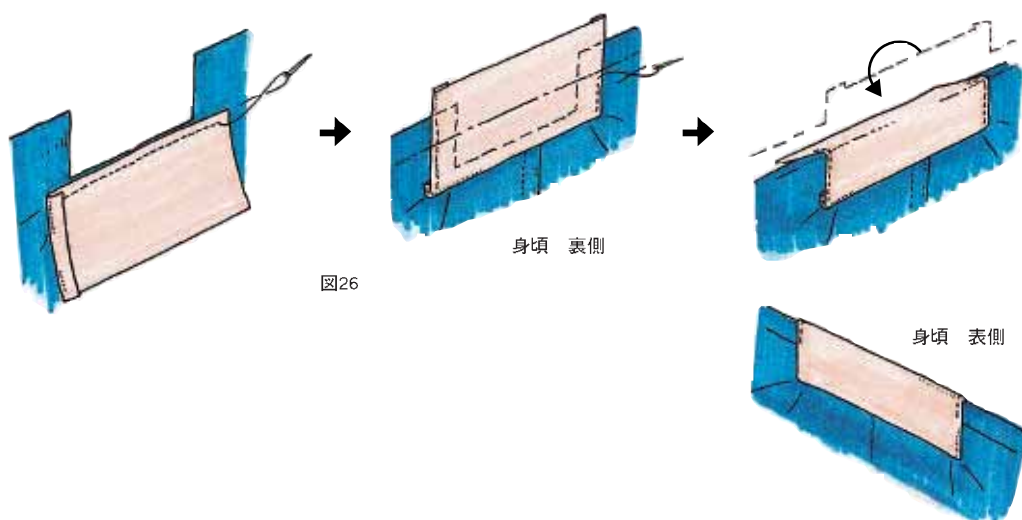
写真76

カパラミブは4種の刺繍で様々な表情を描き出しています。

衿

1 小衿・衿

衿の切り込み部を開き、かすりの布の衿芯を身頃の裏に縫います。並縫いです。(図26)



身頃の衿になるところを小衿と一緒に前に折り、形を整えます。うしろ衿の中を6cmにします。(写真77)



身頃は衿から裾まで折ります。衿から裾に向かって徐々に細くしています。(写真78)



2 衿から裾まで帯状の布を縫う

衿から裾周りまで身頃の周囲に巾6cmの帯状の布を置き、まつります。(写真79、80)

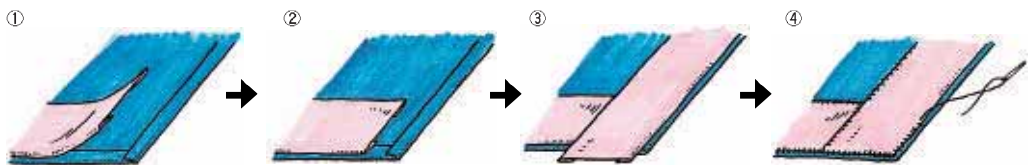


写真79



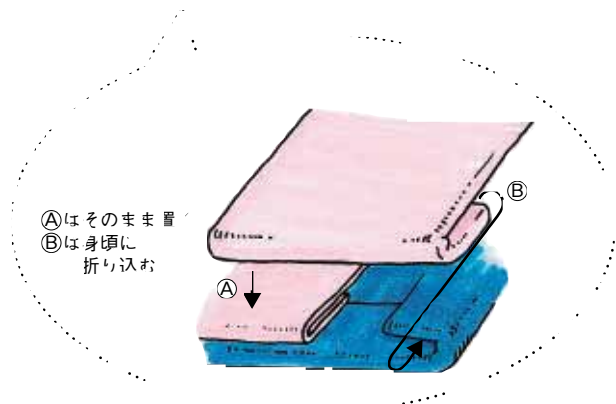
写真80

裾の角は帯状の布を身頃と組み合わせています。(図27)



裾

図27



裾まわりから衿まで全て帯状の布を縫い付けると、身頃のできあがりです。

袖

1 切り抜き模様・刺繍

袖は筒状にする前に、袖の布にも身頃と同じように切り抜き模様をつけます。

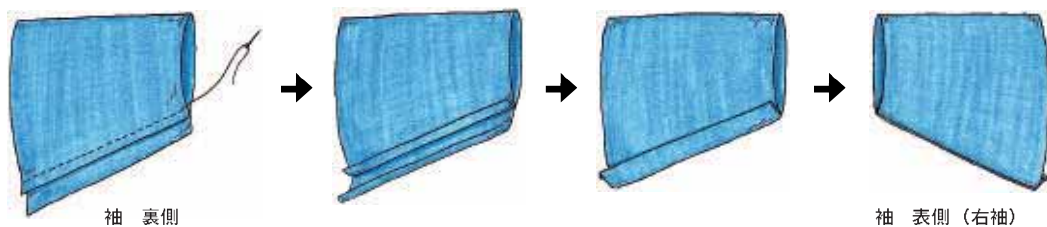
カスケラリ、オホカラとその変型、返し縫いで刺繍を施し、身頃の周囲につけた布と同じ模様入りの布を袖口の縁に沿って縫い付けます。(写真81)



写真81

2 筒袖

筒袖を作ります。袖口を23cm、袖丈を37cmにします。縫い始めと終わりは返し縫いをします。縫いしろは前側に倒します。内側よりも、上になる側の縫いしろの巾を広くして巻き込むようにします。(図28)



袖 裏側

袖 表側 (右袖)

図28

袖が出来ました。(写真82)



写真82

左袖

袖をつける

袖を身頃に縫い付けます。身頃を裏にして袖を入れ、脇の位置を合わせます。(写真83)



写真83

身頃と袖は脇の場所を先に縫い、固定します。脇から肩の方へと縫い進め一周して脇の所まで戻ります。縫代は袖側に倒し、縫います。(図29)

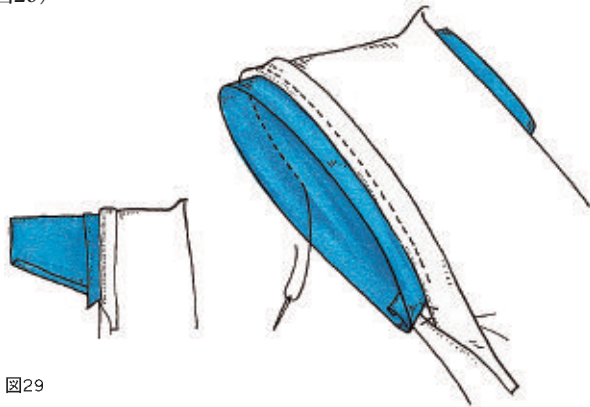


図29

完成



写真84



写真85



写真86



写真87



写真88

このカバラミツの手本となったのは、浦川さんの母、アイヌ女性の手仕事を受け継いできた文化伝承者・浦川タレさん制作のカバラミツです。

チヂリ

チヂリ(又はチンヂリ)は切伏を置かずに刺繍だけで模様をつくる唯一の木綿衣です。木綿地の衣服の中には和服の古着もあり、それに刺繍を施したものもあります。切伏は下地の補強にもなっていましたから、チヂリは大きな布や和服が手に入りやすい時代につくられたと考えられています。北海道の全域に残るチヂリは、刺繍模様のつけ方で、十勝、静内、上川など、いくつかの地方に分類できます。



チヂリ

ここで紹介するチヂリは十勝地方に伝えられているもので、帯広に住む山本ヤス子さんが製作したものです。



山本ヤス子さん

材料・用具

[材料・用具]

- ・一着分の布（黒色：ぬるま湯に一晩浸けて洗ったもの）※6
 - 身頃：2m60cm×2枚 布の幅は35cm
 - 袖：80cm×2枚 布の幅は35cm
 - 衿：1m60cm×1枚 布の幅は17.5cm
 - 紐：40cm×6cm×4枚
- ・仕立てる糸
 - 木綿糸：黒色
- ・小衿（衿芯）
 - 木綿布：黒色
- ・刺繍用の糸
 - 絹糸：白、茶、緑、灰色
- ・針
- ・ハサミ
- ・印つけの用具

※6寸法は今回製作したチヂリのものです。

湯通しをして、生地を落ち着かせた木綿布。(写真89)



写真89

身頃の布には、縫いしろの印をつけ、肩山に左右10.5cmずつ切り込みを入れておきます。
(図30、写真90)

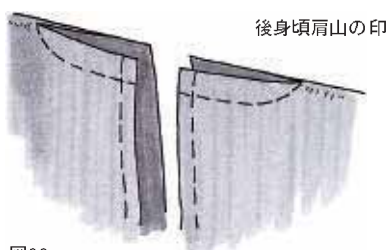


図30



写真90

身頃・衿・袖の布に模様を写す

1 背縫い・脇縫い

背縫いは縫しろを1.5cmにして並縫いします。脇縫いは肩山から38cmあけ、縫しろを1.5cmにして縫います。

2 脇縫い・切り抜き模様の布を張り付ける

模様は背縫いを中心に左右対称になっています。
(写真91、92)



写真91



写真92

左右対称の模様は、模様の半分を描いた型紙を使い、片側に模様を写します。次に型紙を裏返してもう一方の側に模様を写します。(図31)

衿、袖の布も同じように模様を布に写します。

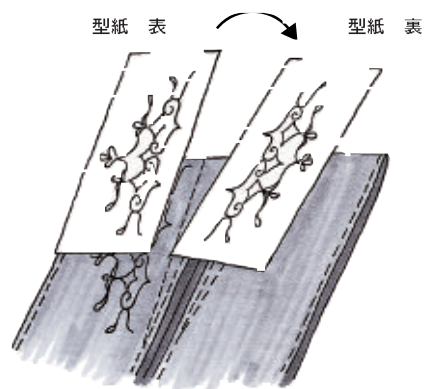


図 31

模様転写の模型図

- 背縫いと脇縫いを終えてから模様を布に描き刺繍を始めます。模様は身頃の前後がつながります。今回のチヂリでは、何着も製作している山本さんが刺繍作業のやりやすさから、背縫いを終えたところで刺繍を始めています。途中まで刺繍を進め、脇縫いをしてから前後の身頃の模様をつなげました。

衿

身頃に衿をつけます。後ろ身頃の中心と衿布の中心を合わせます。

この時に模様の位置を確認します。衿の布は中表に合わせます。

衿布を前身頃の衿の形に沿わせてしつけをしておきます。

衿布は縫いしろを1cmにして縫います。縫いはじめや終わりは、返し縫いをして衿を一周します。縫い方は並縫いです。(図32)

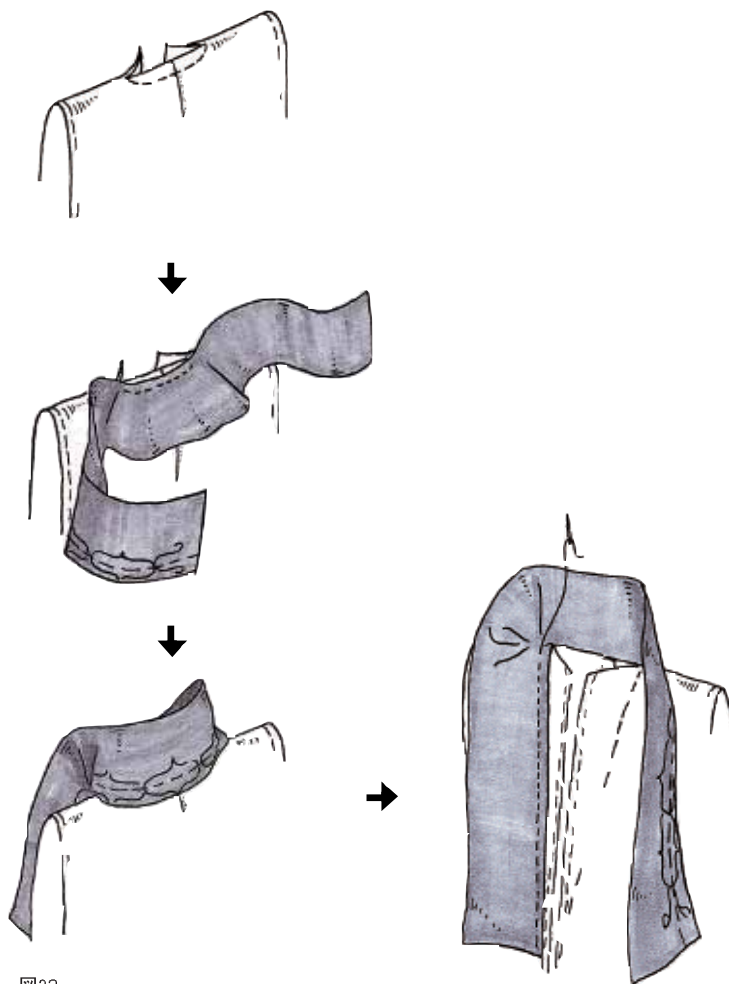


図32

刺繍

1 オホカラ

刺繍は衿からはじめます。白い絹糸を使い、直線の刺繍をします。(写真93)

縫い初めは糸玉をつくらず布の裏から針を入れ、三目ほど並縫いをしてから刺繍をはじめます。

縫いはじめの部分は後で折り返すので隠れます。糸をきつく引くと輪(オホ)の丸みが無くなるので注意します。8ページを参照。



写真93

[山本さんによる刺繍の継ぎ足し方]

(図33)

①鎖縫いの糸の輪・オホを大きな輪にのままして、糸は裏に出しておきます。まち針で大きな輪を仮止めます。

②布を裏にして新しい糸をこれまでの縫い目に絡めます。糸玉は作りません。

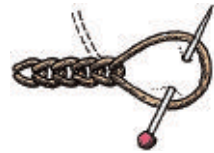
③この糸を表の大きな輪の中に通します。

④輪をつくっていた糸を裏から引き、これまでの輪の大きさに合わせます。この後は新しい糸で刺繍を続けます。

⑤布を裏にして元の糸を針に通し、縫い目に絡めて止めます。糸玉は作りません。

※絹糸は抜けやすいので、糸玉をつくりませんが、めだたないように処理します。

① 表側



② 裏側



③ 表側



④ 表側



⑤ 裏側



図33

曲線の模様は茶色の絹糸で刺繍します。輪の大きさは白い糸の刺繍と同じです。線が滑らかにつながるように針を進めます。刺繍が交差するときにはその上を跨いで縫います。(写真94)



写真94

衿から身頃へと刺繍の線がつながります。(写真95)



写真95

この糸で全体の模様を描きます。写真は刺繍の途中で、しつけ糸がついたままの状態です。(写真96)



写真96

尖った模様の先には「つの」が糸で縫われています。(図34)



図34

花のような模様は古くから使われていました。渦巻きもよく見られる模様のひとつです。(写真97)



写真97

[刺繍の進め方の例](図35)

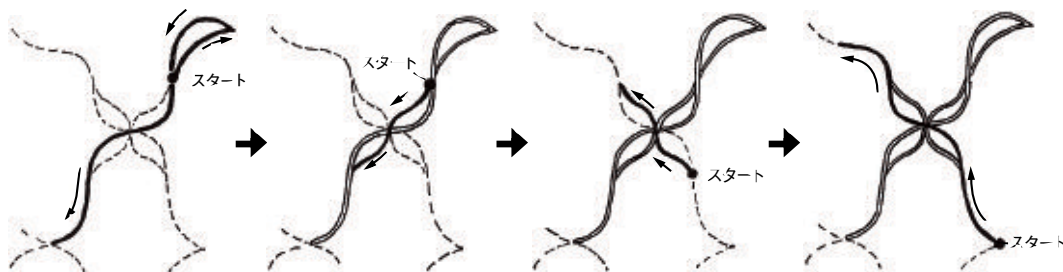


図35

2 その他の刺繍

オホカラで囲まれたところには、オホカラの他、別な刺繍をします。緑色と灰色の絹糸を使います。フェザーステッチ(写真98、図36)、ボタンホールステッチ又はブランケットステッチ(図36)、返し縫いです。9ページを参照。



写真98



フェザーステッチ (変形)

図36



ボタンホールステッチ
又はブランケットステッチ (変形)

衿・衿下・裾

1 衿・小衿

衿をつくります。身頃の裏側から木綿布で小衿をつけます。(写真99)

小衿と衿の布を一緒に二つ折りにして巻き込み、しつけます。(図37)



写真99

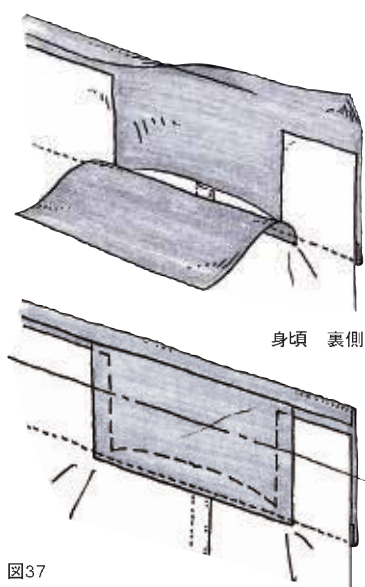
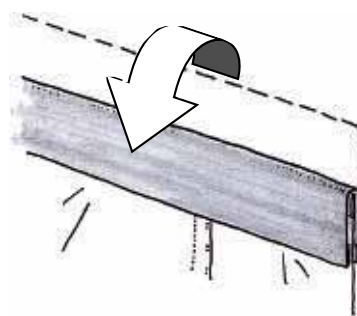


図37



模型図 (断面図)

身頃の衿から下、裾は布端の巾1.5cmを内側に折り耳ぐけします。裾の角の処理です。(図38)

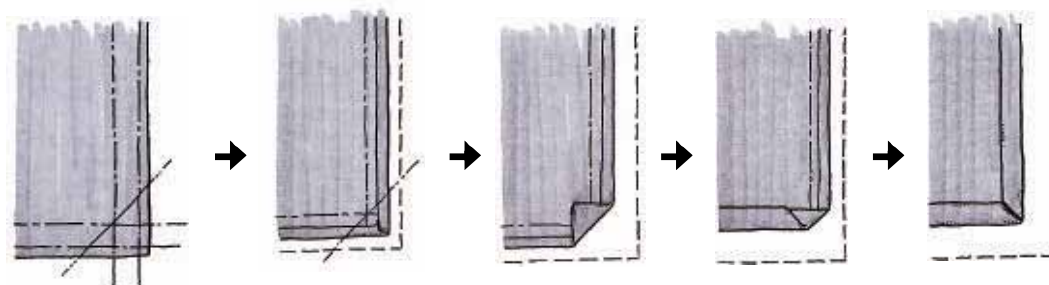


図38

衿先の処理です。(図39)

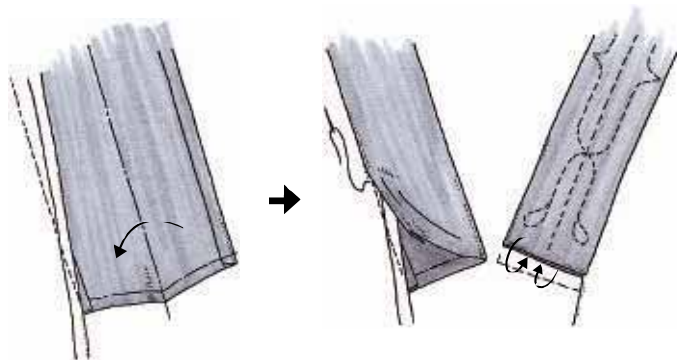


図39

衿先は袋縫いをします。内側は縫い目が外側にも内側にも出ないように耳ぐけします。
(写真100、101、102)



写真100

衿先内側



写真101

衿先表側



写真102

衿巾はうしろ衿を6cmにします。左右の衿先は7cmの中になります。このチヂリの衿は和服のような仕立てになっています。

袖

1 刺繍

袖山を中心に左右対象の模様を刺繍します。袖の下は彎曲した形に裁断しています。(写真103)

模様は糸の色を替えたり、別な手法の刺繍を加えます。



写真103

2 舟底袖

布を中心（袖山）から折り、表のまま下側を並縫いします。縫しろは5mmです。次に袖を裏返し、縫しろを1cmにして縫います。縫しろは筒状になります。さらに表に戻し、筒状の縫しろを袖の後側に縫いとめます。

袖口は三つ折りにして縫います。(図40)

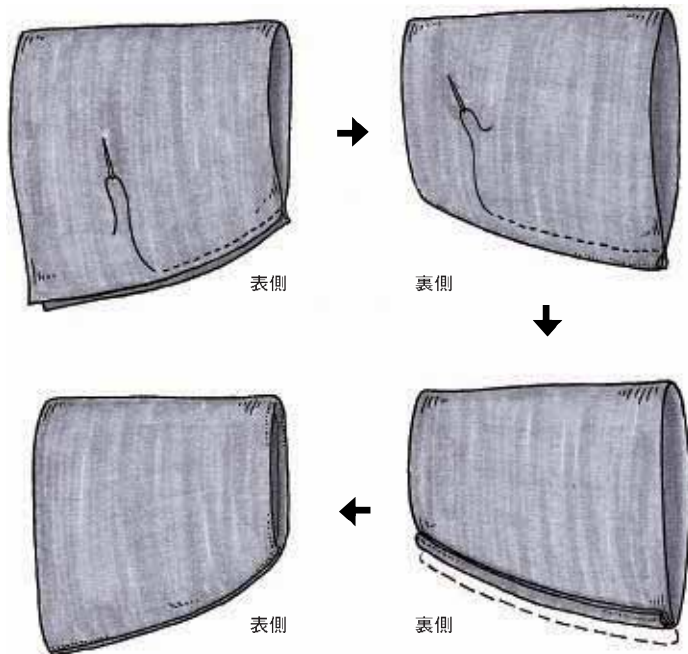


図40

右袖の作り方

袖をつける・紐をつける

袖を表側にして、裏にした身頃に差し入れ、並縫いします。縫しろは袖側に折り、縫います。(図41)

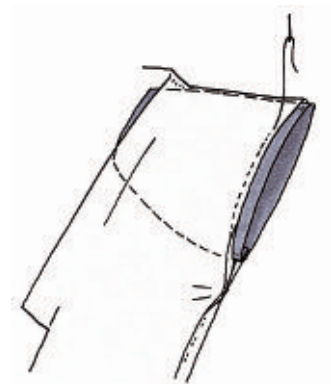


図41

袖の下側、左右の身頃の縫しろは開いて縫います。(写真104)



写真104

山本ヤス子さんは、左右の袖は同じ日に一緒に取り付けなければいけないと教わってきました。身頃に片袖だけを縫い付けると、縫わなかった袖がもう一方を探して動き出すというのです。

紐は40cm×1.8cmの袋縫いをした黒の木綿布です。紐は右袖の下、左右の衿の先そして身頃の内側、左袖の下の計四本縫い付けます。(図42)

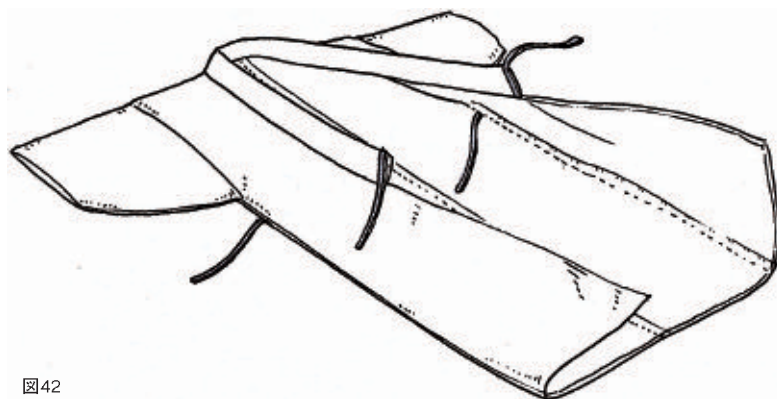


図42

完成



写真105



写真106



写真107



写真108



写真109



写真110



写真111



写真112

刺繍だけで模様をつけた衣服、チヂリ。北海道東部十勝地方に伝わる模様です。刺繍の糸には絹糸の他に木綿糸も使われていました。



写真113

刺繍で描く模様は決まっている訳ではありません。模様は作り手の数だけ存在するのです。

アイヌの女性は衣服を作るとき、家の中の平和と家族の健康を祈りながら縫ってきました。そして大切な人のため、愛情を込め模様を縫い付けてきたのです。

「縫う」というアイヌ女性が受け継いできた手仕事。その技術によって切伏や刺繍で木綿衣に描きだしてきた文様は、アイヌの創造力の豊かさと美的感性の高さを物語っています。

参 考 文 献

木綿衣の製作にあたって、参考となる文献をいくつか紹介します。

・アイヌ文化振興・研究推進機構編

1998:『アイヌの美・装い—土佐林コレクションの世界—』アイヌ文化振興・研究推進機構

1999:『テケカラペ—女のわざ—ドイツコレクションから—』アイヌ文化振興

2000:『馬場・児玉コレクションにみる 北の民 アイヌの世界』アイヌ文化振興・研究推進機構

—:『集藏品目録』1 アイヌ文化振興・研究推進機構

・アイヌ文化保存対策協議会編

1969:『服飾』『アイヌ民族誌』第一法規出版

・アイヌ民族博物館監修

1993:『アイヌ文化の基礎知識』草風館

・アイヌ民族博物館編

1992:『アイヌの衣服文化—着物の地方的特徴について—』増補版 アイヌ民族博物館

・旭川市博物館編

1997:『旭川市博物館修藏品目録』Ⅸ 民族資料／衣服関係 旭川市博物館

・岡村吉右衛門

1979:『アイヌの衣文化』衣生活研究会

1993:『アイヌの衣装』日本の染織16 京都書院

・小川早苗・かとうまちこ

1996:『アイヌ紋様を曾祖母から継いで五代』アイヌ文化伝承の会手づくりウタラ

・萱野 茂

1978:『アイヌの民具』『アイヌの民具』刊行運動委員会

*現在、出版されているのは、すずさわ書店版。

・金田一京助・杉山寿栄男

1941:『アイヌ芸術』1 服装編 第一青年社

*1973年、並びに1993年、並びに1993年、北海道出版企画センターが復刻・出版。

・国立民族学博物館編

1993:『アイヌモシリ 民族文様から見たアイヌの世界』国立民族学博物館

- ・ 児玉作左衛門
 - 1967:『江戸時代初期のアイヌ服飾の研究』『北方文化研究報告』20 北海道大学・児玉マリ
 - 1967:『アイヌ民族の衣服と装飾品』『北海道の文化』7 清文堂
- ・ 佐々木利和
 - 1995:『アイヌの工芸』日本の美術354 至文堂
- ・ 静内町・北海道ウタリ協会静内支部編
 - 1993:『静内地方のアイヌの衣服—1993 国際先住民年記念事業—』静内町・北海道ウタリ協会静内支部
- ・ 天理大学・天理教道友社編
 - 1991:『ひと・もの・こころ—アイヌのきもの』天理教道友社
- ・ 東京国立博物館編
 - 1992:『東京国立博物館図版目録・アイヌ民族資料編』東京国立博物館
 - 1993:『アイヌの工芸』東京国立博物館
- ・ 北海道ウタリ協会編
 - 1994:『ピリカ ノカーアイヌの文様から見た民族の心—』北海道ウタリ協会
- ・ 北海道開拓記念館編
 - 1999:『アイヌの装い—伝統と創造—』北海道開拓記念館
- ・ 北海道教育委員会
 - 1968:『アイヌ民族資料調査報告』北海道教育委員会
- ・ 北海道教育庁社会教育部文化課編
 - 1986:『アイヌ衣服調査報告書（Ⅰ）—アイヌ女性が伝承する衣文化—』北海道教育委員会
 - 1987:『アイヌ衣服調査報告書（Ⅱ）—樺太アイヌが伝承する衣文化1—』北海道教育委員会
 - 1988:『アイヌ衣服調査報告書（Ⅲ）—樺太アイヌが伝承する衣文化2—』北海道教育委員会
 - 1989:『アイヌ衣服調査報告書（Ⅳ）—樺太アイヌが伝承する衣文化3—』北海道教育委員会
- ・ 北海道立アイヌ民族文化研究センター編
 - 1997:『イミ 着る』ポン カンピソシ2 北海道立アイヌ民族文化研究センター
- ・ 四辻一郎編
 - 1981:『アイヌの文様』笠倉出版社

木綿衣を展示・収蔵している施設

木綿衣を展示、あるいは収蔵している施設をいくつか紹介します。

北海道内

- ・アイヌ民族博物館 白老町若草町2-3-4
- ・旭川市博物館 旭川市神楽3条7丁目
- ・網走市立郷土博物館 網走市桂町1-1-3
- ・岩内町郷土館 岩内郡岩内町字清住5-3
- ・浦河町立郷土博物館 浦河町字西幌別273
- ・小樽市博物館 小樽市色内2条1-20
- ・萱野茂二風谷アイヌ資料館 平取町字二風谷
- ・河村カ子トアイヌ記念館 旭川市北門町11丁目
- ・釧路市立博物館 釧路市春湖台1-7
- ・国際染色美術館 旭川市神居町高台忠羽
- ・静内町アイヌ民族資料館 静内町真歌
- ・市立旭川郷土博物館 旭川市4区1条1丁目
- ・市立函館博物館 函館市青柳17-1
- ・新十津川開拓記念館 樺戸郡新十津川町字中央1-24
- ・弟子屈町屈斜路コタンアイヌ民俗資料館 弟子屈町字弟子屈276-1
- ・苫小牧市博物館 苫小牧市末広町3-9-7
- ・美幌博物館 網走郡美幌町字美禽253-4
- ・平取町立二風谷アイヌ文化博物館 平取町字二風谷
- ・北海道大学農学部附属博物館 札幌市中央区北3条西8丁目
- ・北海道開拓記念館 札幌市厚別区厚別町小野幌
- ・北海道立北方民族博物館 網走市字塩見313-1
- ・幕別町蝦夷文化考古館 幕別町千住114-1
- ・室蘭市民俗資料館 室蘭市陣屋町2-4-25
- ・森町公民館郷土資料室 森町字御幸町132

アイヌ生活文化再現マニュアル
縫う—木綿衣—

2001年3月 発行

発行 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

〒060-0001

北海道札幌市中央区北1条西7丁目

プレスト1・7 (7階)

TEL (011) 271-4171 / FAX (011) 271-4181

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で禁止されていますので、あらかじめ財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構あてに許諾をお求めください。

